



今月の農家さん

教え合いの大切さ

野洲市須原
東 敦志さん (39才)



野洲市で野菜農家を始めて3年目の東さん。きっかけは、耕し手のない畑が荒れているというニュースでした。おじいさんと一緒に野菜を作っていた頃を思い出した東さんは、いともたってもいられず農業大学で1年間研修をして、野菜づくりを始めました。

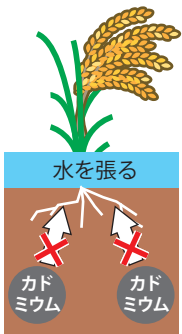
今はキュウリや長ネギ、オクラなどを手広く育てておられます。この時期はキュウリに力を入れておられ、現在ハウス2棟6aで育てているのを、この夏にもう1棟増設するなど順調に進めているそうです。

これまでには失敗もあったそうで、キュウリの接ぎ木苗づくりでは、半分近くを枯らしてしまったりと振り返ります。

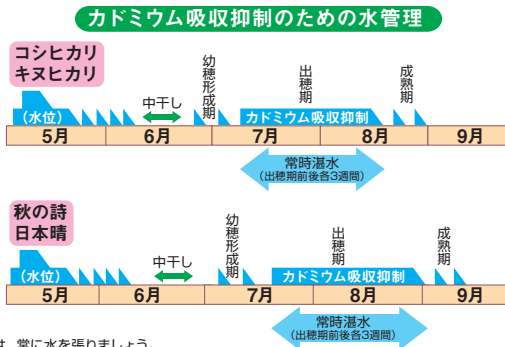
「最近先輩農家や、同年代の若手農家から様々な話を聞いたり、色々な相談に乗ってもらったりしています。自分で調べて作業をしていた時よりも上手いくようになりましたよ」と東さんは教え合いの大切さを話します。

最後に東さんは「経験を積んで早く一人前になり、皆さんの悩みや相談にお答えできるようになりたいです」と今後の目標を語りました。

営農情報



穂が出る前後各3週間の時期は、常に水を張りましょう。



◆カドミウム吸収抑制対策について

カドミウムは人体に有害な重金属であり、農作物は根を通じて土壌中のカドミウムを吸収します。日本では「食品衛生法」により、米に含まれるカドミウムの基準値は0.4 ppm以下となっており、これを超える米は食用としての販売・流通が禁止され、生産者負担での回収や廃棄が必要になります。

対策として、穂が出る前後の各3週間(早生品種は7月10日頃～8月20日頃、中生品種は7月20日頃

から9月1日頃が目安)は、常に水を3cm程度張る「湛水管理」を行い、水稲がカドミウムを吸収しないよう努めましょう。

また、この時期の湛水管理は、胴割粒や白未熟粒などの発生を少なくし、米の品質向上に繋がります。

◆穂肥・後期除草剤について

穂肥の施用は収量の増大や登熟の向上など、稲の生育後期に重要な作業です。施用時期は基本的に幼穂の長さで出穂日を予想して判断します。コシヒカリ・滋賀羽二重糯は幼穂長1cm(出穂18日前)、みずかがみ・キヌヒカリ・日本晴は幼穂長1mm(出穂25日前)、秋の詩は幼穂長5mm(出穂20日前)が穂肥の施用時期の目安となります。また穂肥の施用量は葉色と株張りによって判断します。

また、この時期には雑草の防除も重要ですが、除草剤の施用時期に留意してください。例えば、一年生雑草やホタルイなどに効果がある「バサグラン粒剤」は収穫60日前までの施用となっており早生品種に使用される場合は注意が必要になります。

夏期農談会にて、説明や現地相談をさせていただきますので、ぜひご参加ください。